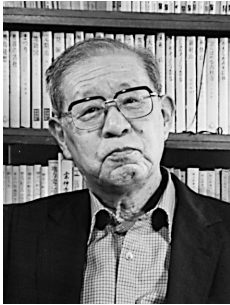


歴史地理学会の思い出

中 島 義 一



(一)

幾つもの学会に参加しましたが一番御縁が深かったのが歴史地理学会、50周年を迎えるとの事で感無量です。古参会員の一人として思い出話の幾つかを綴ってみましょう。公的な記録については別に手配されるでしょうから気楽に思い出すまま書かせて頂きます。

ある年菊地利夫先生からの年賀状に添え書きがありました。歴史地理の学会をはじめるから参加するよにとのことです。さっそく参加したのが第1回大会(1958年、於、日本大学)です。その後今に至るまで病気・所用等で欠席したことが2～3回位、ほとんど毎回出席しています。会の創設事情については関係していませんので存じません。

当初は会長の制度はなく菊地先生が常任委員長として会を代表しておられました。

(二)

初期の学会の功労者として先ずあげられるべきは中田榮一先生です(当時立教大学教授)。

創設以来永く事務局を立教大学で引受けられ、庶務会計の責任者として多忙な会務を処理されるほか会員通信の編集も担当されました。当時の学会は年1回論文集としての紀要と年数回連絡誌としての会員通信を出していました。紀要の方は編集委員の仕事ですが会員通信の方は中田先生が担当されていました。それに例会も常任委員会も立教大学、すべて中田先生のお世話です。後年の常任委員

会はどこの大学でも会議室ですが、初期は中田先生の個人研究室でした。テーブルをかこんで和気藹藹でしたが得てして会議途中で脱線することがあり、特に初代会長の浅香先生と中田先生がともに富山県出身なので富山県人会みたことになることがありました。話は面白いのですがそれでは用がすみませんので適当な時に「先生、議事を」と声をかける必要がありました。「おお、そうであった」との浅香先生の声が今も耳に聞こえてくるようです。

(三)

その頃の若手役員に菊池一雅君という人がいました。愉快な人で「僕等は歴史地理学会のヤングパワーだ」と言っていました。僕等とは彼と私です。2人が最年少の常任委員だったのは事実ですがヤングパワーはオーバーで、指示があればお手伝いする程度にすぎません。また「歴史地理学会はキクチでもつ」とも言っていました。菊地利夫先生、菊池万雄先生と彼、キクチが3人そろったからというわけです。元気者だった彼も病を得て今はこの世の人ではありません。

(四)

当初本会の名称は日本歴史地理学研究会でした。研究会を学会に改めてほしいとの要望が一般会員の方から出てきました。研究会では内輪のグループの会のような印象をもたれ、大学に出張申請をする時など具合が悪いというのです。早速常任委員会の議題になりました。研究会を学会にという点は誰も異存はありません。会の名称が問題になりました。そのまま研究会を学会にすると明治期以来の永い伝統のある歴史学者主体の日本歴史

地理学会と同名になってしまいます。その頃だいぶ影が薄くなっていましたがその会は存続していたのです。また日本地理学会、日本地理教育学会等、全国学会の名称は日本を冠するのが当然と思われていました。ある方の提案でいっそのこと日本をとってはどうか。研究対象は外国でもよいのだし。この意見に一同賛成で今の日本を冠しない歴史地理学会が誕生したわけです。

(五)

集会担当の常任委員が永かったのもその方面のことを書くことにします。

大会と例会につき、会場の手配、プログラムの作製、総会・評議員会の議長と発表会の座長の選出依頼等が主たる任務です。

議長は常任委員会に提案し承認を得てから依頼します。座長の選任は集会委員に一任されています。議長については形式上冒頭におはかりし、司会者一任の声があってから事前に頼んでおいた人を指名します。

議長には会場校の古参教授の人に依頼するのが普通で、その人が評議員ならば評議員会の、そうでなければ総会の議長を依頼しました。会場校に適任者がいない時は近隣の大学の方におねがいました。

座長については私は次のようにしていました。①つとめて多くの方に依頼し、特定の人、特定の大学の卒業生に集中しないようにする。②平素多忙な会務を処理している常任委員、事前の準備と当日の運営に多忙な会場校の先生方には依頼しないようにする。ただし予定していた人に急に差し支えができたばあいは頼みやすい常任委員仲間に代役を頼むことがある。③なるべく発表テーマに専門の近い人に依頼する。

発表者については新人発掘につとめました。その年の共同課題に近い分野の研究者で未入会の人、特に地方学会の動向に注意し、地方学会では発表しているが中央ではまだの

人に入会と発表の依頼状を出しました。会員増加に役立ったはずです。

(六)

大会では前日に会場校を訪れ、同校の先生方と打合わせをし、必要があれば同校の幹部の先生に御挨拶したこともあります。地方で大会をやる場合、しばしば新聞社の人取材にきます。これは当日のことも前日のこともありましたが、会場校の方は多忙ですから私がお会いして質問に答え、会の性格や活動内容を説明したりしました。写真入りで報道されることもあり、当日の夕刊、あるいは翌日の朝刊を見るのが楽しみでした。かくて前日から巡検終了まで全日程参加することになります。巡検では当日の参加者の中から巡検記執筆者と解散前参加者を代表して謝辞を述べる人を依頼するのも集会委員の仕事です。前者は若手会員、後者は高齢者におねがいました。適任者が複数ある場合は遠方からの参加者を選びました。

(七)

1970年頃は全国的に大学紛争の嵐が吹きまわっていました。ほとんどの大学がその渦中なので会場の手配に困りました。助け舟になったのは高等学校でした。高校在職の会員にお世話をおねがいました。学会活動を中断せずにすんだのは高校関係者のおかげと申しても過言ではありません。会場を引受けて下さった高校を列挙し、改めて関係者にお礼を申し上げます。

〔大会〕 立教高校

〔例会〕 都立第三商業高校、立教高校、日大桜丘高校、日大二高、専修大附属高校、都立両国高校

私は後年常任委員長、会長をつとめさせて頂きました。そのころのことは知っている方が多いと思いますので、ここまででペンを置きます。(名誉会員)